

年間第二十五主日

2014.9.21

東京教区司祭 寺西英夫

第一朗読 イザヤ 55・6-9

第二朗読 フィリピ 1・20c-24、27a

福音朗読 マタイ 20・1-16

ただいまの福音、今日のミサの福音は天の国のたとえ話であります。「天の国」と言っても、いわゆる天国とは少し違う。天国というのは完成した状態ですかね。天の国の完成。それはわたしたち一人ひとりにとっては死を超えて完成するわけですが、イエスの福音の特徴は、天の国、神様の恵みの支配、神様の愛の支配は、今から、もう今この地上の旅の間すでに始まっているのだという、そこにイエスの福音の福音たるゆえんがあります。

今日のたとえ話は、まさに、その天の国、神様の恵みの支配がもう今始まっているのだということは、どういうことなのか、ということ非常にわかりやすく、そして面白く、印象深く伝えるものであります。「わたしはこの最後の者にも、同じようにしてやりたいのだ」。「同じように支払ってやりたいのだ」。このお言葉、イエスのこのお言葉が今日の福音の中心と言ったらいいでしょうか。あるいは、今日の聖書朗読、今日のミサ全体のメッセージと言って良いと思います。

このたとえ話は、もともとはファリサイ派、律法学者たちに向けてお話しになったたとえ話だと思われまます。ファリサイ派、律法学者たちはイエスの時代に非常に強かった勢力であります。彼らの特徴は、功績主義と言うのでしょうか、律法を、神様の掟をきちっと守る。守っていれば、守っていることによって救われる。守っていない者は救われない。どれだけ律法をきちっと守っているか、そこに救いの分かれ道がある。そういうふうな教え、彼らはそういう生き方で生きていた。イエスはそれに対して今日のたとえ話をなされたわけでありまます。

しかし、このファリサイ派、律法学者たちの考え方というのは、必ずしもイ

エスの時代のユダヤ教の社会の中だけではなくて、その後、今も、わたしたちのこの日本の社会においても支配的な考え方と言って良いでしょう。競争主義と言いますか、この私たちの社会は、やはりなんと言っても競争主義、きちつと仕事をすればそれなりの報酬がある。しかし、しなければだめだ。しない者は昇進できない。給料も高くはならない。まったくできない者は就職はできない。そういう社会であります。そういう社会の中では、大切なことは、きちんと評価する、評価が偏らないように、できるだけ正しい、間違わない評価をする、それが大切なこととなります。たとえ話の中の、朝早くから働いた人の主張です。

今、大相撲秋場所が真っ最中です。わたしも小学生のころからずっと大好きで、あれほどテレビ向けのスポーツはないとつくづく思うわけですが、だから、いつもテレビの前に釘付けになっているわけです。行司が勝ち負けを判断する。しかし行司も人間ですから間違えることが、よくわからないようなこともある。そこで、勝負審判というのがいて、物言いを付けたりします。この頃ではビデオ判定というのまで取り入れて、できるだけ正確に判断する、評価する。それはそれで、このわたしたちの社会の中で大切なことであります。しかし、そういう社会は、やっぱり疲れる。そういう社会の中で走り続ければ、いつかもうへたばってしまう。行き詰ってしまう。そして、人は生きていれば、わたしのようになんか段々と歳を取ってきて、一つひとつ、いままでできたことができなくなってくる。そういうやりきれない現実があります。これが地の国の現実です。

イエスは、この地の国に生きているわたしたちに、「しかし、地の国だけではない。天の国があるのだ。神様の恵みの支配が、今、この地の国にいる間、競争社会の中で必死になって生きている、そういうときにも、その真ん中でさえも、神様の恵みの支配がある」、それをイエスは力強く宣言し、そして、それを実践したわけでありました。最後の1時間しか働かなかった者にも、この雇い主は同じように1デナリオンを支払います。朝から働いていた者は不平を言うわけですが、しかし、「あなたがたとは1デナリオンで契約した。わたしはこの最後の者にも同じように支払ってやりたい」。この考え方は、地の国であるこの日本でも、今の社会の中でも、イエス様のお蔭なのか、少しは行き渡っていると

言えます。「日本国憲法」第 25 条でしたか、「すべての国民は健康で文化的な最低限度の生活ができる、する権利がある」、そういうことを宣言しています。そして、できるだけそれに見合うような政治を行おうと一応はしているわけですが、でもそれですべてがカバーできているわけではない。競争に弱い人、向かない人がいる。もともと競争できない人もいます。

イエスは、「どんな人にも永遠の命、神様の愛の充満を味あわせてやりたい、どうしてもそうしたいのだ」と、今日のこのたとえ話を通してわたしたちに語り掛けておられます。この「支払ってやりたいのだ」、「やりたいのだ」という言葉ですが、これは動詞ですけれども、名詞の形では、今日の第一朗読に「わたしの思いとあなたがたの思いとは天と地の差がある」とありました。「思い」という言葉は名詞ですけれども、ヘブライ語とギリシア語の違いがあっても、同じ言葉が使われているわけです。「やりたい」という動詞、それは名詞になれば「神様の思い」、私たちは神様の思いを頂いている。私たちは、今、生きている間、この地の国と天の国と、両方に足をかけて生きている。だから、大切なことは、地の国に生きておりながら、天の国の恵みを呼吸するということ。毎日、いっぱい神様の恵みを吸って、深呼吸して、そして、それに力を頂いて生きていくということでありましょうか。

わたしたちは、神様の恵みの世界を一所懸命深く深く吸い込むために、深呼吸するために、このミサに出ております。そして、わたしたちの大好きなイエスが一番大切な祈りとして教えた「主の祈り」もそうです。「み心が天に行われるとおり、地にも行われますように」。この「み心」というのは神様の思い、「し

てやりたいのだ」という神様のお心、それを指しています。神様の思いが、神様の愛が、わたしたちだけではなくて、すべての人に及びますように。今日のミサを通して厚く祈りましょう。